

鞆に見る歴史のロマン

鞆の歴史観光トレイル

福山市

目 次

	ページ
鞆に見る歴史のロマンー鞆の歴史観光トレイル	1
トレイルー1 海から来た客人たち	
トレイルー2 歴史のなかの景観ー多様な顔をもつ鞆の町	
トレイルー3 今も生きる昔のくらしー歩く・見る・食べる	
【トレイルー1】 海から来た客人たち	5
① 朝鮮通信使、福禅寺で安らぐ(1771年)	7
② シーボルト、鞆を観光する(1826年)	9
③ ペリー、保命酒を飲む(1854年)	11
④ 尊王攘夷派の7人の公卿立ち寄る(1863-4年)	13
⑤ 蒸気船「いろは丸」衝突するー坂本龍馬と紀州藩(1867年)	15
【トレイルー2】 歴史のなかの景観ー多様な顔をもつ鞆の町	17
① 水軍の砦・大可島城からの眺め	19
② 支配の景観・鞆城址からの眺め	21
③ 海の民の象徴・医王寺	23
④ 旅人が見た鞆・海上からの眺め	25
⑤ 近世の都市計画・寺町の形成	27
【トレイルー3】 今も生きる昔のくらしー歩く・見る・食べる	29
① 保命酒物語	31
② 漁師町のくらし	33
③ 豪商のまつりと庶民のまつり	35
④ 江戸時代商家の面影・太田家と沢村船具店	37
⑤ 江戸時代商家の面影・旧魚屋萬蔵宅から対仙酔楼へ	39
【おすすめの本】	41

鞆に見る歴史のロマン

鞆の歴史観光トレイル

トレイル-1 海からきた客人たち

鞆は港町として近世以来栄えました。船で人や物資を運ぶのは、今日にいたるまで最大の輸送手段です。瀬戸内海のほぼ真ん中に位置する鞆の港は、東西交通の要であり、明治になって鉄道が敷かれるまで、その機能を昔から維持し続けました。

江戸時代、鞆の町は船乗りやさまざまな商人たちだけでなく、異国の賓客が立ち寄る観光スポットでした。潮を待つ間の数時間から数日間の滞在まで、多くの人たちが鞆に立ち寄っています。とりわけ幕末から明治への激動の時代に、その転換を担った人たちが鞆に立ち寄り、鞆の豪商たちがそれを支えました。残されている史料からだけでもそのドラマを伺い知ることができます。

朝鮮通信使、福禅寺で安らぐ(1771年)

シーボルト、鞆を観光する(1826年)

ペリー、保命酒を飲む(1854年)

尊王攘夷派の7人の公卿立ち寄る(1863-4年)

蒸気船「いろは丸」衝突する 坂本龍馬と紀州藩(1867年)

トレイル-2 歴史の中の景観 多様な顔をもつ鞆の町

歴史の中で鞆の町は、さまざまな意味をもっていました。それは鞆の町を見下ろす高台に立ってみるとよくわかります。近世の始まる頃から瀬戸内海の海上交通が発達するにつれ、鞆の持つ意味が少しずつ変化してきました。瀬戸内海を縦横に活躍する水軍の拠点として、遙か四国を見渡すことのできる大可島の意味は大きかったと思われますし、江戸時代、鞆の民を支配し、海上交易を一手に納める鞆城主は鞆湾全体を見渡せる場所が必要であったと思われます。多様なビューポイントから鞆を眺めると、鞆の町はそれぞれの時代に応じて多様な顔を持っていたことがわかります。

水軍の砦・大可島城からの眺め

支配の景観・鞆城址からの眺め

海の民の象徴・医王寺

旅人が見た鞆・海上からの眺め

近世の都市計画・寺町の形成

トレイル-3 今も生きる昔の暮らし 歩く・見る・食べる

鞆の町には昔から、海の漁で生業をたてて暮らしている人たちがいました。そうした人たちとともに、船を持ち、交易の仕事をし、あるいは数多く立ち寄る船乗りや客たちを相手にさまざまな商売をする人たちも暮らしていました。これらの人たちの暮らしが、江戸時代から残る街並や商家、そして鞆の人たちが受け継いできた祭りや行事に、そしてなによりも街角で出会う鞆の人たちの中に、その風情を感じとることができます。

保命酒物語

漁師町の暮らし

豪商のまつりと庶民のまつり

江戸時代の商家の面影・太田家と沢村船具店

江戸時代の商家の面影・旧魚屋萬蔵宅から対仙酔楼へ

鞆に見る歴史のロマン - 鞆の歴史観光トレイル



- トレイル-1 海から来た客人たち
- トレイル-2 歴史のなかの景観 - 多様な顔をもつ鞆の町
- トレイル-3 今も生きる昔のくらし - 歩く・見る・食べる
- 図中の数字は、本編中の※の数字に対応します。

トレイル上の番号と各施設の対照表

番号	施設等
1	鞆の浦バス停
2	旧榭屋清衛門宅(坂本龍馬宿泊跡)
3	昭和初期建物を使った銀行
4	保命酒屋
5	保命酒屋
6	鞆の津商家
7	対仙酔楼
8	福禅寺対潮楼
9	宿屋籠藤
10	円福寺
11	対可島城跡
12	突堤
13	猫屋跡
14	土佐屋跡
15	旧魚屋萬蔵宅(坂本龍馬と紀州藩の交渉跡)
16	数々のレトロな商店
17	福山市鞆の浦歴史民俗資料館(鞆城跡)
18	沢村船具店
19	保命酒屋
20	太田家住宅(旧中村家)
21	朝宗亭
22	いろは丸展示館
23	常夜燈
24	平の集落
25	ちくわ作り体験
26	淀姫神社
27	医王寺
28	太子殿
29	保命酒屋
30	戦前の床屋を生かしたレトロな喫茶店
31	寺町通り
32	小松寺
33	沼名前神社
34	安国寺
35	竹輪製造工場
36	竹輪製造工場
37	原の集落
38	小烏神社

トレイラー 1 海からきた客人たち

鞆は港町として近世いらい栄えました。船で人や物資を運ぶのは、今日にいたるまで最大の輸送手段です。瀬戸内海のほぼ真ん中に位置する鞆の港は、東西交通の要であり、明治になって鉄道が敷かれるまで、その機能を昔から維持しつづけました。

江戸時代、鞆の町は船乗りやさまざまな商人たちだけでなく、異国の賓客が立ち寄る観光スポットでした。潮を待つ間の数時間から数日間の滞在まで、多くの人たちが鞆に立ち寄っています。とりわけ幕末から明治への激動の時代に、その転換を担った人たちが鞆に立ち寄り、鞆の豪商たちがそれを支えました。残されている史料からだけでもそのドラマを伺い知ることができます。

朝鮮通信使、福禅寺で安らぐ(1771年)

シーボルト、鞆を観光する(1826年)

ペリー、保命酒を飲む(1854年)

尊王攘夷派の7人の公卿立ち寄る(1863-4年)

蒸気船「いろは丸」衝突する 坂本龍馬と紀州藩(1867年)

1. 朝鮮通信使、福禅寺¹⁾で安らぐ(1771年)

「福禅寺」⁸境内の本堂に隣接する客殿は、「対潮楼」⁸と呼ばれています。水道を挟んで仙酔島・弁天島に對面するこの客殿座敷からの景色は素晴らしく、ここを宿所とした朝鮮通信使²⁾との交流でも有名です。

自然景観を横長の窓で切り取るにより、薄暗い座敷の中に海の青と島の木々の緑に彩られた景色が、あたかも一幅の画を眺めているような効果を生んでいます。

また、東に面するため、明け方には茜色の朝焼けの中に島影が浮かび上がります。

季節のうつろいに伴い、日の出や月の出も南北に振れ景色に変化を与えます。同時に、日の出・月の出の位置と仙酔島との関係から季節の変化を読むこともできます。つまり天然の暦となっているのです。

福禅寺は、朝鮮通信使の三使(正使・副使・従事官)の迎賓館・宿舎として使用され、日本の漢学者や書家らとの交流の場ともなりました。

正徳元年(1711年)の7代將軍家宣の襲職祝賀のために来日した第8回通信使では、新井白石³⁾の主導により、幕府の予算の逼迫^{ひっぱく}から従来の饗応、待遇を全面的に変更する制度改革が行われます。この改革では、対馬から江戸の間での宴席の持たれる場が6か所に限られます。その際、赤間関(下関)、大坂(大阪)、京都、名古屋、駿府といった往時の大都市と並んで鞆が選ばれました。

この改革は日朝間の外交摩擦に発展しましたが、その時の通信使高官たちは、対馬から江戸までの景色のなかで、鞆の景観が最も美麗であると称賛し、従事官の李邦彦が「日東第一形勝」(朝鮮より東で一番美しい景勝地)の墨書を残しています。

また、延享五年(1748年)の9代將軍家重の襲職祝賀のために来日した、第10回通信使の正使洪啓喜は、この客殿を「対潮楼」と命名し、洪景海が「対潮楼」の書を残しています。

こうした対日交渉の軋轢のなかにいた通信使にとって、対潮楼からの美しく平和な景色は、真に心身が安らぐ場であったのでしょう。

- 1) 福禅寺は、平安時代の天曆年間(947~957年)の創建と伝えられる真言宗の寺院で、平安時代に村上天皇の命により空也上人によって建立されたと伝えられている。
- 2) 朝鮮通信使は、江戸時代、將軍の代替りごとに朝鮮国王から派遣された祝賀使節で、1607年から1811年までに12回(うち1回は対馬まで)日本に来ている。
- 3) 新井白石は、江戸時代中期の儒学者。7代將軍徳川家宣に仕えた。

【こぼれ話】 延享五年(1748年)4月、第10回朝鮮通信使が江戸幕府への参上の途中に鞆へ到着した際、彼らは激怒しました。日本の接待役が三使の宿所が対潮楼の客殿に宿泊する慣例を知らなかったため、楽しみにしていた福禅寺ではなく、寺町の阿弥陀寺が宿所とされたからです。一行は、福禅寺以外での宿泊を拒否します。船上で一泊した後、翌朝早く船を出してしまいました。

一方、復路では、福禅寺に泊まることができたので、通信使一行は大変上機嫌であったそうです。客殿に『対潮楼』の名が贈られたのはこの時です。



福禅寺・対潮楼の客間からの眺め

1. シーボルト、鞆を観光する（1826年）

江戸時代、瀬戸内海は物流の大動脈で、物資だけでなく、さまざまな人々も行き交っていました。その中央に位置する鞆は、潮待ち港として大変賑わっていました。朝鮮通信使、琉球使節のみならず、出島のオランダ商館長一行も立ち寄っています。

鎖国政策のもと、日本の海外への窓口は長崎の出島だけで、唐船とオランダ船のみが入港を認められていました。この出島にはオランダ商館があり、その責任者の商館長には、通商のお礼に江戸まで出向き、将軍に謁見して献上品を贈り、また、通商の許可・継続の条件順守を誓う義務がありました。これを「江戸参府」といいます。

シーボルト¹⁾は文政9年(1826年)のオランダ商館長の江戸参府に同行し、その帰り路、鞆に上陸し、鞆の町を観光しています。²⁾

5月17日深夜零時頃、シーボルトの乗っていた「日吉丸」は仙酔島の東沖合に到着し、翌18日早朝に漕船に曳かれて鞆の浦に入港しました。用向きを聞きに出向いた月番宿老の土佐屋八三郎は、「上陸して休息をとりたいので、宿と風呂を用意してもらいたい」との要請を受けました。ところが本陣³⁾の上杉氏と中村氏は「蘭人は賤しき者」と理由をつけ、これを拒絶しました。

宿泊先が決まらないまま、昼頃、シーボルトたちは勝手に鞆に上陸し、結局「猫屋」¹³⁾と「土佐屋」¹⁴⁾とに宿泊することとなりました。残念ながら、この二つの建物は現存しません。

シーボルトは鞆の町を散策し、「大変きれいな町並み」「活気にあふれた町」「たくさんの小売店がある」あるいは「心から迎えてくれた」などと日記に記しています²⁾。「福禅寺・対潮楼」⁸⁾や「医王寺」²⁷⁾などにも寄り、鞆の草花や昆虫なども観察しています。また、「宿屋籠藤」⁹⁾に行き、遊女二人を呼んだこともわかっています。

5月18日夜には、30隻の引き舟で港外に出、無事長崎に向けて出帆しました。

1) シーボルト(1796年ドイツ生まれ)は、文政6年(1823年)にオランダ商館付きの医師として来日した。長崎の鳴滝に塾を開き、蘭学の発展に大きく貢献している。しかし、シーボルト事件により、1829年に日本を追放された。

2) シーボルト著、斎藤信訳、「江戸参府紀行」、平凡社、1967年。

3) 宿駅で諸大名や幕府役人などが宿所とした公認の宿泊施設。

4) 5年の任期を終えたシーボルトの帰国に際し、国禁の日本地図や葵の紋服の携行が発覚し関係者が処罰された事件。シーボルトはスパイの嫌疑を受けて糾問1カ年の末

1829年国外追放、再渡航禁止を宣告された。

5) 現在、この版画はオランダのライデン国立民族学博物館に収蔵されている。

【こぼれ話】 シーボルトは、1829年のシーボルト事件⁴⁾で国外追放となりましたが、彼はあらゆるものに興味・関心を抱く、観察・研究熱心な壮年でした。「...医王寺にでかけた。...植物群はカシ・コナラ・マツ・クリ・エノキ・イヌヒバ・ツツジ・グミ・ハゼ・タケ・クズなどで、他の樹木とからみ合っている。ハゼの上でコフキコガネを見つけた。...」と、日記に記しています。また、彼がオランダに持ち帰ったものの中には『備後鞆土産小松寺庭松之図』という版画があります。たまたま立ち寄った一地方のお土産の版画まで収集しています。⁵⁾



浮世絵 「備後鞆の湊」 五雲亭貞秀作（個人蔵）

人蔵)

資料出所：「鞆の町並みと商家の賑わい～シーボルトも称賛～」、P. 12

1. ペリー、保命酒を飲む（1854年）

「泰平の眠りをさますじょうきせん たった四杯で夜も眠れず」。大変有名な狂歌ですね。お茶の中でも上質の「上喜撰^{じょうきせん}」と、蒸気によって進む「蒸気船」とをかけたもので、たった四杯（四隻）でしかないのに日本中大騒ぎとなり、特に幕府関係者は夜も眠れない状態である、ということ非常に上手に皮肉ったものです。

19世紀なかば近くになると、ロシア、イギリス、フランス、アメリカなどの艦隊が、開国・開港を求めてやって来るようになりました。その都度、何とか追い返してきましたが、嘉永6年（1853年）6月3日、4隻のペリー艦隊が浦賀沖に停泊しました。幕府は、フィルモア大統領の国書を浦賀で受け取ることを拒否、長崎に回航するように伝えましたが、ペリー提督は威嚇的な態度で受け取りを迫りました。やむを得ず幕府は、直ちに退去することを条件に国書を受け取り、ペリーは、国書の回答を受け取るために来年、再来港することを告げ、6月12日に江戸湾を離れました。

翌嘉永7年（1854年）1月13日、ペリーは再び江戸湾にやってきました。幕府は横浜村に応接所を設け、約1ヶ月の協議の末、3月3日に日米和親条約が調印されました。その後、交渉の場を下田の了仙寺に移し、下田条約が5月25日に締結されました。

これにより、1639年にポルトガル船の来港を禁止して以来215年ぶりに日本開国となり、日本はいよいよ幕末の動乱に突入していきました。

このペリーが保命酒^{4, 5, 19, 29}を飲んだのです。このときの老中首座（現在で言えば内閣総理大臣）が備後福山藩主の阿部正弘だったのです。福山藩は代々、保命酒を御用酒としており、阿部正弘は幕府に献上していました。条約の締結には宴会が付きものですが、横浜応接所での接待の宴会でこの保命酒が供されました。おそらく、食前酒のシェリー酒のような感じで受け止められたのでしょうか、大変好評を博したようです。また、宴会はこれ一度ではなく、昼食会も含めしばしばあったようで、ここでも保命酒が供されたと思われます。

【こぼれ話】 いまや世界中で“日本料理”“和食”が人気を博しています。しかし、料理はペリーのお気に召さなかったようです。「...日本人の食物に関しては、たいへん結構とは言いかねる。見た目の美しさや豪華さにどんなに贅を凝らそうとも、日本の厨房はろくなものを生み出していないと言わざるを得ない...」¹⁾と、酷評しています。

1) マシュー・C・ペリー著、木原悦子訳、『ペリー提督日本遠征記』、小学館、1996年。



韃の浦特産の「保命酒」

1・ 尊王攘夷派の7人の公卿立ち寄る（1863・4年）

ペリーの来航・開国、相次ぐ修好通商条約の調印、幕府の弱腰外交などにより、尊王攘夷論が急速に高まってきました。

尊皇攘夷を藩論とする長州藩は、朝廷内の尊王攘夷派の公卿（三條実美ら7人）と結び、朝廷での主導権を握りましたが、これに対し、文久3年（1863年）8月18日、薩摩藩と会津藩は、御所を警備していた長州藩士を襲撃し、この7人の公卿を謹慎処分しました。これが「8月18日の政変」です。

翌朝、7人の公卿は長州藩士に護られながら京を逃れ、夜来の雨の中、笠に蓑姿で長州に落ちてゆきました。これが「七卿落」といわれるものです。

七卿を含む長州勢約400人は、8月22日の夕刻20艘の船で長州に向け兵庫を出港、その途上8月23日に鞆へ入港・上陸し、保命酒屋の「中村家（現太田家）」²⁰で、わずかの時間休息をとり、その夜再び強風をおして、慌ただしく出港していきます。

翌元治元年（1864年）7月、五卿（この間二人死去）は再び上洛の途中、7月18日から20日まで「中村家（現太田家）」に投宿しています。しかし、21日多度津に入港して蛤御門の変で長州が惨敗したことを聞き、再び長州に下ってゆきます。

この中村家に滞在中、三條実美は次の和歌を詠んでいます。

『世にならず鞆の湊の竹の葉を かくてなむるもめずらしの世や』

（“竹の葉”が酒のことで、保命酒を示しています。）

鞆という町は非常に面白い存在です。現在の福山市の中心部が形成されるはるか以前、古くは神功皇后の逸話の時代から、瀬戸内の中央部に位置する潮待ち港としてさまざまに重要な役割を果たしてきました。また、この七卿落が示すように反幕勢力を町屋が泊めています。しかも、福山藩は西国鎮守の譜代の大藩で、少し前には老中首座・阿部正弘を出しています。鞆の豪商の気骨、時代の先見性がうかがえます。

時の亡命者たちが立ち寄った「中村家（現太田家）住宅」ですが、1800年前後に建てられた瀬戸内を代表する保命酒醸造業者の建造物群で、いまは修復され国の重要文化財の指定を受けています。

【こぼれ話】 「中村家（現太田家）住宅」は海の本陣としても用いられ、店の土間の白黒の市松模様や天井の網代^{あじろ}¹⁾細工、茶室のにじり口（普通より高く、お客に頭を下げさせない配慮）、欄間の透かし、釘隠の金具あるいは隠し階段等々、細部までのこだわりが感じら

れます。また茶室だけでなく、主屋のさまざまなところが、豪商の粋と教養をさりげなく示しています。

1) 網代とは、竹、ヒノキ等を薄く細長くし、編んだ網状のもの。中村家では天井、障壁、戸などに使われている。



中村家（現太田家）住宅：搾り蔵二階の窓から見た風景（左側が主屋、右側が土蔵群）

1. 蒸気船「いろは丸」衝突する～坂本龍馬と紀州藩～（1867年）²²

“いろは丸事件”が起こったのは、坂本龍馬が京都の近江屋で暗殺されるわずか半年前、翌年には明治になろうとする慶応3年（1867年）4月23日のことでした。

龍馬率いる土佐海援隊が、伊予大洲藩から借り受けた蒸気船「いろは丸」（45馬力、160トン）に商品や武器・弾薬¹⁾を積み込んで、長崎から大阪に向かっていましたが、午後11時頃、讃岐国箱ノ岬沖で、長崎に向かっていて紀州藩の軍艦「明光丸」（150馬力、887トン）に二度にわたって衝突されました。

明光丸に乗り移ったいろは丸の海援隊士34名は、一つは修理のため、もう一つは“海難事故は現場近くで解決するもの”と主張して、いろは丸を鞆に向けて曳航させました。しかし、いろは丸は24日早朝宇治島の南で沈没してしまいました。

龍馬たちは廻船問屋「栴屋清右衛門宅」²⁾に、紀州藩は「円福寺」¹⁰⁾に投宿しました。早速、「魚屋萬蔵宅」¹⁵⁾や「福禅寺・対潮楼」⁸⁾で、我が国初の蒸気船衝突事故の万国公法を持ち出しての賠償交渉が開始され、激論が交わされました。

ところが4月27日午後、明光丸は突然長崎に向けて出航してしまいました。「紀州はどういうつもりだ。あまりに無礼である。我々を鞆の港に放り上げたまま、急用があるからといって出航してしまっただけに²⁾と、龍馬は激昂しています。また、西郷吉之助や大阪の同志に「長崎で決着をつける。いずれ血を見ずにはおさまるまい。」と激怒した内容の手紙を送っています。

明光丸を追って長崎に入港した龍馬は、岩崎弥太郎や後藤象二郎を引っ張り出したり、イギリス東洋艦隊の司令官を絡めたり、さらには「船を沈めたその償いは金を取らずに国を取る」という唄を花街ではやらせたり、龍馬の幅広い人脈、優れた政治力、したたかな交渉力を遺憾なく発揮して万国公法による交渉を行っています。

結局、たまりかねた紀州藩は薩摩藩に調停を依頼し、五代才助の斡旋により約8万3千両（後に7万両に減額）の賠償金を払うことになりました。

この半年後の慶応3年11月15日、龍馬は、京都近江屋で中岡慎太郎とともに暗殺されました。明治という新時代を迎えるほんのわずか前でした。この時、龍馬33才。

1) 賠償交渉の中で、当時最新のミニエー銃を積んでいたと主張したが、現在までその部品すら発見されていない。これも賠償交渉術の一つであったのだろうか？ なお、引き上げられた部品や沈没状況は「いろは丸展示館」²²⁾に展示されている。

2) 慶応3年5月中旬に寺田屋伊助に宛てた手紙より。

【こぼれ話】 常に暗殺の危機にあった龍馬ですが、いろは丸事件の賠償交渉時も決死の覚悟をしていました。“才谷梅太郎”という偽名を用いたり、二階の隠し部屋に投宿したりもしています。妻お龍への手紙は、“鞆殿”と変名で宛てられています。さらには、親しい者に遺品ともいえる品物を贈ったり、万が一の時のお龍の処遇まで依頼しています。



旧魚屋萬蔵宅：坂本龍馬と紀州藩の談判所跡

トレイラー 2 歴史の中の景観 多様な顔をもつ鞆の町

歴史の中で鞆の町は、さまざまな意味をもっていました。それは鞆の町を見下ろす高台に立ってみるとよくわかります。近世のはじまる頃から瀬戸内海の海上交通が発達するにつれ、鞆の持つ意味が少しずつ変化してきました。瀬戸内海を縦横に活躍する水軍の拠点として、遙か四国を見渡すことのできる大可島の意味は大きかったと思われますし、江戸時代、鞆の民を支配し、海上交易を一手に納める鞆城主は鞆湾全体を見渡せる場所が必要であったと思われます。多様なビューポイントから鞆を眺めると、鞆の町はそれぞれの時代に応じて多様な顔を持っていたことがわかります。

水軍の砦・大可島城からの眺め

支配の景観・鞆城址からの眺め

海の民の象徴・医王寺

旅人が見た鞆・海上からの眺め

近世の都市計画・寺町の形成

トレイル-2 歴史のなかの景観 - 多様な顔をもつ鞆の町



■ 図中の数字は、本編中の※の数字に対応します。

2. 水軍の砦・大可島城からの眺め

「大可島山頂」¹¹からは、足下に從える鞆の街と港を除いて、遠く四国に至るまでの瀬戸内の海と島々の広がりを一望することができます。ここに砦を築けば、目の前の瀬戸海の往来のすべてに睨みをきかせることが可能になります。

大可島城は、鎌倉末期から南北朝期に築かれたといわれています。現在では陸続きとなっていますが、当時は鞆の街との間も水道で分かたれていて、文字通り「大可島」という島でした。¹⁾

水上交通の要所であり、海で囲まれた難攻不落の大可島は、水軍の拠点として戦略上他に得難い地であったのです。

事実古来より鞆の水軍は瀬戸内の戦いにかかわり、その勝敗に大きな役割を果たしてきました。なかでも、「足利幕府は鞆に興き鞆に亡ぶ」といわれるように、足利氏の盛衰に大きな役割を果たしています。

建武3年(1336年)、足利尊氏は、後醍醐天皇の親政に反旗を翻します。しかし、新田義貞や楠木正成に敗れて、京都を追われて水路で九州を目指して落ちてゆきます。その途上に鞆の浦の「小松寺」³²に逗留し、光厳上皇の院宣を手にしめます。その院宣を抛りどころに九州で勢力を盛り返し、再び京都に攻めのぼりますが、その際、鞆に武将を集結させて軍議をしています。

正平4年(1349年)には、足利尊氏の子で、尊氏の弟直義の養子であった足利直冬が、長門探題として西に下り大可島城に入城します。しかし、足利尊氏、高師直・師泰兄弟と足利直義が対立し、直義が失脚します。そのため、直冬は備後の尊氏方から攻撃され、九州へ落ちてゆくこととなるのです。

こうした足利一族の軍勢は、畿内と九州との往来に際して、常に鞆を抛り所としながら海路を用いますが、その背景には足利氏に従い奮戦する鞆水軍がいたと思われます。

戦国時代には、毛利の勢力下にあった村上水軍の一族が、大可島城を拠点として鞆を押さえます。信長に追われた最後の将軍義昭が、毛利氏を頼り落ちて行く先を鞆としたのも、先祖に忠節を献げてくれた鞆の水軍の存在が心に浮かんだのではないのでしょうか。

1) 関ヶ原合戦の後、安芸・備後の国主となった福島正則が鞆城を築城した際に、大可島は今日のような陸続きとなり、大可島城は廃城となった。

【こぼれ話】 大可島の名前は、対ヶ島に由来すると言いますが、鯛ヶ島という説もあります。鯛は古来より鯛の名所として名高いので、こちらの方がふさわしいかもしれません。

ところで、瀬戸内海の各所では、3月中旬から5月初めの満潮時に、鯛が腹を上にして浮ぶ、^{うきだい}浮鯛という現象が見られます。強い潮流や水温変化のせいともいわれますが、原因は定かではありません。足利直冬ら大可島に立てこもった武将たちも、戦いの合間には舟を出し、浮鯛を網で求めて一時の安らぎを楽しんだのでしょうか。



大可島からの眺め

2. 支配の景観・鞆城址からの眺め

鞆城址は、鞆市街の中央にあります。石垣で囲まれた高台に築かれた本丸の跡地は、現在「福山市鞆の浦歴史民俗資料館」¹⁷の敷地となっています。¹⁾そこから周囲を見渡せば、鞆の港や街の家並みとその彼方に広がる自然景観を一望することができます。

北と西には沼隈半島の山々、東には仙酔島の水道という天然の要害に囲まれ、南の入り江には天然の良港を持っています。さらに、その先には古来より九州・中国大陸と畿内とを結ぶ瀬戸内海の往来が広がり、鞆の地の利の素晴らしさを確かめることができます。

ここに城を置き、城下町を築くことは、瀬戸内の軍事の要所を押さえると同時に、海上からの巨万の富を手にするこも、可能になるのです。

鞆城の築城については諸説ありますが、毛利元就・小早川隆景が天文年間(1532～1555年)に築城したとする説が有力です。このころより水軍の拠り所だけではなく、舟運による物産の集積所としての鞆の持つ力が、明らかになってきたのでしょうか。

慶長5年(1600年)の関ヶ原合戦に敗れた毛利氏は、備後・安芸を追われます。代わりに二国の領主となった福島正則は、鞆城城代大崎玄蕃おびんぼに命じ、鞆城の大修築に取り組みました。

新たな鞆城は、本丸を二之丸・三之丸で囲む近世の城郭で、その縄張りは、東は福禅寺⁸、北は「沼名前神社」³³参道、南は鞆港にまで及ぶものであったといえます。

しかし、未完のまま、元和元年(1615年)の一国一城令によって破却され、元和5年(1619年)に正則も、広島城無断修築を咎められ領地没収され追われてしまいます。

代わって備後に封じられ、福山城を築城した水野勝成は、鞆城跡の館に子の勝俊を置きましたが、その後は、城址には奉行所が置かれ、幕末まで鞆の行政をつかさどることとなります。鞆の街は、城下町から港湾商業都市に姿を変えながら、海上交通の要所として大きく発展してゆきます。

本丸跡の高台に立って鞆の街を眺める際に、完成することがなかった城下町鞆の姿に思いを寄せてみてはいかがでしょうか。

1)「福山市鞆の浦歴史民俗資料館」の足下には、かつての鞆城石垣の遺構が残されている。天正年間以前の自然石を積み上げた「野面積み」、天正年間以後の、小石をはさみ表面を揃えた「打込みハギ」、江戸初期の切石で表面を揃えた「切込みハギ」と、石垣が築かれた各年代の特徴を読み取ることができる。また、石垣に刻まれた種々の刻印も確認することができる。

【こぼれ話】 鞆城城代となった大崎玄蕃^{げんぱ}が、福島正則に仕え始めた頃、男とも思えるような一人の女が奉公を望みました。玄蕃が「力があるか」と問うと、台所にあった大臼を持ち上げ、相撲を取らせると14人を投げました。玄蕃は、大変喜び召しかかえました。

ところが、この女は男勝りの力持ちですが心根はやさしく、20年の後、福島氏が改易になると家来たちが家財を持ち去るなかで、女は庭から自分が密かにためた大金を掘り出し、玄蕃に差し出しました。他国に行く玄蕃を見送った後、女もいずこへともなく小舟で去ったといわれています。



鞆城址からの眺め

2. 海の民の象徴・医王寺¹⁾

「医王寺」²⁷は他の社寺から少し離れた平の集落の山手に位置しています。医王寺までの坂道は少なからず急で遠いのですが、境内からの眺望はその苦勞に十分値するものです。

医王寺の足下の街道沿いには、医王寺を信仰する「平の集落」²⁴が道沿いに細長く広がり、その向こう側に鞆港が大きく弧を描いています。さらに、港の北に広がる鞆の町並みの向こうには、仙酔島が望まれます。晴れた日の早朝にここを訪れば、その景色を茜に染める朝日に出会うこともできます。

医王寺からの景観は、松村呉春²⁾ら、多くの画家の題材にもなっています。

また、文政9年(1826年)に、鞆に寄港したオランダの医師のシーボルトも、植物観察のために医王寺を訪れており、この景観を楽しんだでしょう。

瀬戸内の港街では、平と医王寺、草戸と明王院³⁾のように、集落の山手に社寺を置く、信仰の事例を多く見ることができます。

山手に並び立つ社寺の伽藍は、常に危険に立ち向かう海の民の心の拠り所でした。それとともに、港湾施設が不十分な中世までにあっては、わが港を目指すための大事な目印ともなったでしょう。

さらに、山手に位置している社寺の境内は、いざという時には集落の人々が身を守るための砦として立てこもる場ともなったでしょう。⁴⁾現在の医王寺の壮麗な石垣は、福島正則の鞆城代大崎玄蕃^{ほんぼ}が慶長年間(1600年頃)に修築したのですが、城下の背後を守る砦としての役割に着目したとも考えられています。

海の民である平の人々にとって、医王寺から平の集落とその背後に広がる瀬戸内の海の景観は、何よりもわが集落、海と医王寺との強い結びつきを確かめさせてくれるものであったでしょう。

なお、寺の裏山へ続く小道をしばらく登った所にある太子殿²⁸からの眺望もまた素晴らしいものです。

1) 真言宗桃林山慈眼院医王寺は、平安時代に弘法大師が開基したと伝えられる。本尊である薬師如来像は、室町時代中期の木造仏で県の重要文化財に指定されている。

現存する鐘楼は寛永20年(1642年)に初代福山藩主水野勝成が建立し、本堂は貞享2年(1685年)四代水野藩主勝種の再興したものである。

2) 松村呉春(1752年~1811年)。京都の四条派の始祖。

- 3) 芦田側に面した愛宕山のふもとにあり、かつては常福寺といわれ、弘法大師により 807 年に創建されたと伝承されている。明王院本堂(1321 年建立)、明王院五重塔(1348 年建立)は国宝に指定されている。
- 4) 鞆で争乱がある際には、しばしば小松寺³²等の寺院に陣が設けられている。

【こぼれ話】 医王寺の表参道を約 30m降りた右側に、エレキテルの発明で有名な蘭学者平賀源内の生祠(生存中に神として祭ったもの)があります。源内が遊学先の長崎から故郷の讃岐へ向かう途中に、鞆の溝川家に立ち寄ったことによりました。彼はここで陶土を発見して、オランダの釉薬ゆうやくを使った源内焼の製法を伝えました。溝川家では、陶器作りには手をつけず、鍛冶の火床や壁土の原料としてその陶土を販売しました。溝川家を去るとき源内は、土の神・かまどの神・平賀源内大明神を三宝荒神として祀れまつと言い残して、去っていったといわれています。宝暦 14 年(1764 年)に溝川家がこれを祀まつりました。



医王寺からの眺め

2・ 旅人が見た鞆・海上からの眺め

古来より鞆を訪れる旅人の多くは船便により、鞆の港に入ったと考えられます。旅人が船上から初めて目にする鞆の景色、海から眺めた鞆の港や街とそれを囲む豊かな自然おりなす景観は、画題として大いに魅力的なものでした。江戸期には、歌川広重らが浮世絵のテーマにし、近代では小野竹喬¹⁾、吉田博²⁾ら多くの画家が画題に選んでいます。なかでも吉田博の木版画は傑作として広く世に知られています。

瀬戸内の要衝に位置し天然の良港である鞆港は、常に海上交通の要であり、戦略の要所でした。そのため、鞆の人々は常に海から鞆に来たる人々を意識し、海へ顔を向けた街づくりに取り組んできたのです。

海路より鞆港に入港する旅人は、古来より鞆港西の山手に「医王寺」²⁷や「小松寺」³²の伽藍を仰ぎ見ることができました。中世の旅人は、「大可島」¹¹や今日の鞆城址の砦に立てこもる軍勢を見ることができたでしょう。

慶長年間に福島正則の命により、城代大崎玄蕃が修築した鞆城は、鞆の港に向かい三段に本丸、二之丸・三之丸の石垣を重ね、櫓や塀が並び立つ海城でした。

潮待ち港、商業港として大いに栄えた江戸期の鞆では、弧を描く入り江に沿って大可島から現在の棧橋あたりまで、大石を積んで雁木が整備されました。雁木に沿う浜通には、白壁妻入りの倉が立ち並び、港の正面に石造の「大常夜燈」²³も設置されています。³⁾

今日、海の上から鞆の街・港を眺めると、各時代の海へ顔を向けた街づくりへの取り組みが重なり合いながら今日の景観を形作っていることを確かめることができます。⁴⁾

こうした海からの視点から鞆の港を眺めるには、鞆港から走島あるいは尾道に向かって出港する船に乗り、海の旅を楽しむのがよいでしょう。また大可島から南に延びる「突堤」¹²の先に立ち鞆の港を振り返るだけでも、海へ顔を向けた街づくりの素晴らしさを十分堪能できるでしょう。

- 1) 小野竹喬(1889年～1979年)、現在の岡山県笠岡市に生まれ。文化勲章受章。詩情豊かな名作を多く残している。鞆を題材とした名作を何点も残している。
- 2) 吉田博(1876年～1950年)、現在の福岡県久留米市生まれ。太平洋画会を同志らと発足させる。油彩画、木版画、水彩画で活躍する。鞆をはじめ瀬戸内海を題材にした木版画が有名である。
- 3) 雁木、並び倉、常夜燈は、鞆の港のシンボルと江戸期港町の富貴繁栄のシンボルであり、尾道など瀬戸内の港町はその整備に心を砕いていた。
- 4) 古代中世の社寺は、現在の鞆の街の元となった港や浜に正面を向け開かれて行ったと考えられる。たとえば、現在唯一の中世遺構として残されている釈迦堂³⁴にみられるように、安国寺³⁴とその前身であった金宝寺は、東側の浜へ向けるかたちで七堂伽藍が

置かれていたと考えられる。当時は今日より海岸線が近く境内の際まで水辺が寄せていたと言われている。

【こぼれ話】 鞆の港には北前船が寄港していました。北前船とは、江戸時代から明治にかけて大阪から瀬戸内海、関門海峡を経て北陸などの日本海側の諸港を結び、後には北海道にまで延長された航路と船を指しています。それまでは小浜や敦賀から陸揚げして琵琶湖を経由して大阪に諸物資を輸送していました。西回り航路の開発は、寛文12年(1672年)河村瑞賢によって蝦夷と大阪を直行する航路を開発したともいいます。

北国方面への積荷は酒類、衣料品、タバコ、塩、紙、砂糖、米、縄・筵などのわら製品、ろうそくなどでした。大阪方面へは、ニシン、ニシン粕、数の子、昆布、鰯粕などを積んでいました。鞆港では北海道からのニシン粕などをイ草や綿の肥料としておろし、鞆特産の舟釘や錨、保命酒の他、福山の木綿、松永の塩、沼隈の畳表などを積み込んでいました。明治維新になると、封建制の崩壊、電信・郵便の登場、鉄道の施設などによりその役目を終えました。



木版画「瀬戸内海 鞆之港」、吉田博作（福山市鞆の浦歴史民俗資料館蔵）

2. 近世の都市計画・寺町の形成

鞆城址西側を南北に走る道は、西の山手側に数多くの社寺が建ち並んでおり、いわゆる「寺町」³¹となっています。鞆の寺町は、福島正則¹⁾が鞆城を築いた際に、城郭の外西側に整備されたもので、城下町時代の面影を今日に伝えるものです。鞆城廃城の後には、寺町の東側の城郭跡地は町人地となり、町家が立ち並んで今日の景観となりました。緩やかに折れ曲がる道に土塀が連なる景観は、在りし日の鞆の城下町の姿を重ねてみることができる数少ない城下町時代の遺構です。

こうした「寺町」の建設は、豊臣秀吉が、聚楽第を築き御土居（土塁）で囲むことで、京都を城下町に改造しようとした際に用いられ、以後、城下町の建設で一般化した手法です。封建的な身分制度に基づき武士・町方と寺社を区分して住み分けさせると同時に、いざという時には、城下町の外郭を守るための砦として使用することを目的としています。

江戸中期に瓦葺きや塗り込め²⁾が普及するまでは、町方は当然、武家屋敷の多くも板葺き藁葺きであり、戦火にはひとたまりもありませんでした。一方、寺院の建物は瓦葺きで、外構も土塀を取り回し、時には堀を回したものもあったため、しばしば戦の拠点に用いられてきました。織田信長が明智光秀に滅ぼされた際、本能寺を宿所としていたのは有名ですが、鞆でも、かつて広大な伽藍を有していた「小松寺」³²と「安国寺」³⁴が、しばしばこうした用途に用いられています。

鞆城の建設時には、その小松寺と安国寺を結ぶ形で道を作り、その道に沿って社寺を集めて再整備することで、現在の寺町を形成したと考えられます。

また寺町の通りは、北の原の集落と南の平の集落とを、城郭の西端に沿う形で結んでいます。当時の鞆港は、海に面した鞆城の三之丸に組み込まれていたと考えられます。そのため、この道には「原」から「平」の集落に抜けるためのバイパス機能も考えられていたのではないのでしょうか。

城下町の縄張りを考える城主の視点から鞆の街を散策し、城下町の名残を探してみるのも面白いのではないのでしょうか。

- 1) 福島正則は安土桃山時代から江戸時代初期にかけての武将。関が原の戦いで東軍に属して活躍し、安芸と備後の国を与えられ広島城主となった。
- 2) のき裏を含めて全てを漆喰仕上げにしたもの。

【こぼれ話】 寺町の北端に位置する安国寺は、足利尊氏由来の寺であり、鎌倉時代の禅宗建築の面影を伝える重要文化財「釈迦堂」で、全国に知られています。また、福山出身の作家井伏鱒二の晩年の作品である『鞆の津茶会記』(福武書店、1986年)の舞台として、安国寺が登場します。これは天正14年(1586年)から足掛け13年にわたり、鞆周辺で開かれた茶会を記録する形をとった文学作品です。豊臣氏の興亡という大きな時代の変革に巻き込まれてゆく、安国寺^{えいけい}恵瓊ら「^{もののぶ}武士」たちの悲哀が静かな口調で描かれています。

【ささやき橋伝説】 寺町通りの山中鹿之助¹⁾の首塚のそばにうっかりすると通り過ぎてしまうほどの小さな橋があります。この小さな橋は「ささやき橋」といい、1500年前の恋物語を今に伝えています。

その昔、百濟から多くの帰化人がやってきていた頃のこと。百濟からの船は必ず鞆に寄港していましたので、大和朝廷から接待官が派遣されていました。その一人であるワタリと、接待の^{うたげ}宴で歌や踊りで一行を慰める^{かんぎ}官妓の一人である江の浦が恋に落ちました。当時役目柄二人の恋は許されないものでしたが、毎夜橋のたもとで密かに会っていたと言います。しかし、やがて皆の知るところとなり、「別れる。別れるならば許す」と迫られましたが、「私たちのきずなは永遠」と愛を貫きました。二人は抱き合えないように後ろ手に縛られ、石重りをつけて海に沈められたと言うことです。その後鞆の人たちは、毎夜その橋のたもとで二人がささやくのを聞いたので「ささやき橋」と呼ぶようになったそうです。

1) 山中鹿之助は山陰の戦国大名の尼子氏の家臣。毛利氏に敗北後、尼子氏の再興をはかるがかなわず、いまの岡山県高梁市で殺された。首級は当時鞆にいた15代将軍の足利義昭のもとに送られた。地元の人が手厚く葬った首塚がいまも残る。



寺町の風景

トレイラー3 今も生きる昔の暮らし 歩く・見る・食べる

鞆の町には昔から、海の漁で生業をたてて暮らしている人たちがいました。そうした人たちとともに、船をもち、交易の仕事をし、あるいは数多く立ち寄る船乗りや客たちを相手にさまざまな商売をする人たちも暮らしていました。これらの人たちの暮らしが、江戸時代から残る街並や商家、そして鞆の人たちが受け継いできた祭りや行事に、そしてなによりも街角で出会う鞆の人たちの中に、その風情を感じとることができます。

保命酒物語

漁師町の暮らし

豪商のまつりと庶民のまつり

江戸時代の商家の面影・太田家と沢村船具店

江戸時代の商家の面影・旧魚屋萬蔵宅から対仙酔楼へ

トレイル-3 今も生きる昔の暮らし・歩く・見る・食べる



■ 図中の数字は、本編中の※の数字に対応します。

3. 保命酒物語

鞆には、ヨーロッパの食前酒のシェリー酒に似た保命酒があります。日本開国を迫って下田に来たペリーも飲み、1867年のパリ博覧会にも日本国代表産品として出品されて好評を博したり、1876年の合衆国百年祭博覧会にも出品されました。

1659年に大阪からやってきた漢方医の中村吉兵衛が、古来鞆で作られていた「吉備の旨酒(現在の味醂酒)」に16種類の生薬をつけ込んで作ったのが保命酒だと伝えられています。江戸時代には鞆の鉄鍛冶が作る錨や舟釘とともに、福山藩の重要な産物として藩の財政を潤してきました。鞆港には、それらの品物の積み出しまでの倉庫が今も残っています。

明治になるまで保命酒は「中村家」²⁰の専売でしたが、現在は明治維新後に売りに出された福山城の長屋門を店舗にした店、「どっちの料理ショー」で紹介された本みりんを売る店など「4軒の保命酒屋」^{4, 5, 19, 29}が、それぞれ少しずつ異なる味の保命酒を売っています。店頭では氷を入れた小さなグラスで試飲することも出来ます。坂本龍馬やシーボルトも飲んだかな、と古の人々に思いをはせるのも楽しいものです。

中村家は屋号を「保命酒屋」といい、神辺に廉塾^{れんじゅく}¹⁾を開いて庶民の子弟の教育を行った菅茶山、その弟子で日本外史を書いた頼山陽、長州に逃れる途中に立ち寄った三条実美をはじめとする多くの文人墨客と交流を深めています。それとともに、彼らの残した保命酒をたたえる詩や和歌、手紙も残されています。例えば、頼山陽は「漢・蘭・琉球諸藩購求」、朝鮮通信使は「寒いときは寒さを除き、暑いときは暑さを追い払い、憂いや苦しみを抜け出させてくれる」と詩文で賞賛しています。

一方、保命酒を入れるための徳利も創業当初から伊部焼^{いんべ}、頼山陽の漢詩入り三田焼をはじめ、丹波焼、砥部焼、美濃焼など中国、四国、九州の窯に特注したものが使われています。天保年間になると土生焼^{はぶ}、木之庄焼など備後の窯で焼いた徳利が使われるようになってきました。なかでも岩谷焼は唐子踊りが入るなど朝鮮通信使の文化的影響を強く受けたものでした。さらに時代が下がって慶応元年からは鞆の窯で徳利作りが行われるようになりました。こうした徳利は、入江保命酒資料館をはじめそれぞれの保命酒屋の店頭にも陳列してあります。

1) 廉塾^{れんじゅく}は、現在の福山市神辺町生まれの菅茶山が京で朱子学を学び、郷里に開いた塾。全国から常時20人くらいの塾生が学んでおり、頼山陽も塾頭をしていた。

【こぼれ話】 中村家文書によると、九州筋の大名やオランダ人、琉球人が鞆に滞在したときは保命酒の注文をしています。また、長崎を通じて外国からの注文もあったようです。

江戸ではブランド商品として大名達の贈答品として珍重されていましたが、1840年代の嘉永年間には北海道の海岸沿いに函館付近から根室あたりまでの数力所に販売所を設けるなど、驚くほど広い範囲で売られていました。

七代中村吉兵衛は、福山藩の汚職事件に連座して外出禁止の刑に服しています。若くして隠居後約 20 年間失意の日々を過ごした彼は、嘉永元年（1848 年）函館まで出かけています。1300 石の北前船で鞆港を出発し、瀬戸田、御手洗^{みたらい}、下関などに寄港しながら 20 日余りで函館に着いています。



太田家住宅(旧中村家)。保命酒醸造所であったし、七卿落遺跡でもある。

3・ 漁師町の暮らし

鞆はいくつかの顔を持っていますが、その一つが海で暮らしを立てている漁師の町の顔です。古より人々は、瀬戸内の豊かな海で育った鯛やヒラメをはじめ小魚類をとり、それで生計を立ててきました。今もその暮らしが生きており、魚そのものにふれ、感じられる街並みが残っています。

朝とってきた魚をさばきながら売っている小さな魚屋さんを、安国寺そばの「原の集落」^{*37}あたりや焚場^{たてば}¹⁾跡近くの「平の集落」^{*24}あたりで見ることができます。鞆の浦バス停付近^{*1}の海岸の堤防では干物を作る竿が並んでいます。サヨリ、デベラの干したもの、茹でられたカニやシャコやタコ、甘露煮にしたハゼやイシカベリ(この地方の魚の呼び名)がこれらの店に並んでいます。こうした小魚料理を食べさせてくれる店もあります。

海で捕れた魚はさらにすり身にされて竹輪やかまぼこになります。鞆は昔からの竹輪の産地でもあります。街の中には「竹輪を製造しているお店」^{25, 35, 36}がいくつかあり、なかには「竹輪作り体験ができるところ」^{*25}もあります。

街のあちこちに小さな祠があり、お祭りがこうした漁師町の風情に彩りを添えます。魚を並べた小さな店には元気に働くおばさんたちと、小さな祠のまわりでは、鞆の街とともに年齢を重ねてきた魅力的なおじさんたちに出会うこともできます。

鞆の街は迷路のようで道に迷うことがよくあります。室町時代から変わっていない狭い道を歩いていると、思いもかけない眺望や風景に出会うこともできます。

こうした港町や漁師町の風情を感じられる街並みのところどころには、昔なつかしいお店に出会います。食料品店、パン屋、鍛冶屋、酒屋、陶器屋、履き物屋、洋品店など、つい数十年前には当たり前であった「昭和レトロな店」^{*16}が点在しています。犬もゆったりと紐につながれないで歩いており、猫は気持ちよさそうに日なたぼっこをしています。また、「昭和初期に建てられ今も使われている銀行」^{*3}や、「戦前の床屋の鏡をそのまま使った喫茶店」^{*30}などもあります。

鞆の街を歩くと歴史と共存する暮らしの息づかいが感じられ、まるで街全体が博物館のようなところ です。

1) 木造船はフジツボやカキなどの貝類や海草が付着したり、フナムシが着いたりするため、船底を焼いて乾燥させることで船命を長持ちさせる必要がある。これを「たでる」といい、そのたでる場所を「焚場」^{たてば}と呼んでいる。

【こぼれ話】 天竺鯛の仲間の2cmくらいの魚を、鞆を中心にこの地方では“ねぶと”とも“いしかべり”とも言います。“いしかべり”とは「頭が石をかぶったように固い魚」という意味でつけられた呼び名です。食べ方は、頭が堅いので必ずとり、素焼きにしたり唐揚げにしてそのままか三杯酢に漬けて食べます。加工品には頭だけとって骨ごとすり身にして揚げ物にした、“ガステン”があります。カルシウム摂取にはうってつけです。



デベラ干し風景

3. 豪商のまつりと庶民のまつり

瀬戸内海屈指の港町として栄え、商人が活躍し豊かな経済力を持った豪商やその商品の積み出しや保命酒の醸造、鍛冶などに携わって暮らしてきた鞆の人々は、平安で豊かなくらしを願って祭りや行事を行ってきました。それが今も続いています。

鞆の町衆の繁栄の名残がうかがえる行事としては、3月の「ひな祭り」、9月の「八朔の馬だし」があります。なかでも豪華な雛飾りに鞆の商人の隆盛ぶりが伝わってきます。

ひな壇飾りは元禄以前から始まったと言われますが、2月中旬になると「福山市鞆の浦歴史民俗資料館」*¹⁷では商家に伝わった江戸時代からの豪華な段飾りや御殿飾り、調度品が展示されます。また、鞆の街でもそれぞれの家に伝わるおひな様を飾ったり、ちょっと工夫を凝らした今風の人形を飾り、各地から多くの人々が訪れてとても賑やかになります。

3月の第1日曜日には「福山市鞆の浦歴史民俗資料館」で「カルメ焼き」や「ひなあられ」などを作って食べる行事が開かれています。昔、豪華なおひな様の前で子どもたちが「お煮事行事」をしていました。ミニチュアではあるが本物のまな板や包丁、七輪を使い、本物の材料を使って年上の子どもが年下の子どもを指図して実際に料理を作り、雛飾りの前で食べていたといえます。ここで使った道具もあわせて資料館に展示されます。

「八朔の馬だし」は子どもの誕生と健やかな成長を願い、白い木馬を積んだ台車に子どもたちを乗せ、町内を練り歩くものです。最近この行事は復活しました。

庶民の海の安全や豊漁、健康や仕事の発展を願う祭りがほとんど毎月のように行われています。¹⁾ 神社別に見ていくと、海上安全の信仰を集めた渡守神社と無病息災を祈る祇園社など多くの神々を併せて祀っている「沼名前神社」²⁾ ³³では「お弓神事」、「茅の輪くぐり」、「お手火神事」、「チョウサイ」の祭りが行われます。「淀姫神社」²⁶では「渡御・還御祭」（だんご祭りとも言われる）が、「小鳥神社」³⁸では「鞆まつり」があります。「だんご祭り」は餅米とうるち米で作る独特のだんごから名付けられたものです。まつり毎に独特の料理を食べていたようです。³⁾

鞆の街を歩くと、どの家の玄関の軒先にも小さな茅の輪が下げてあります。これは「茅の輪くぐり」の神事が終わった後の茅の輪の一部を持ち帰り、小さな輪に編んで災厄や疫病祓いに飾ったものです。

- 1) それぞれの祭りの開催日は、御弓神事（2月第2日曜日）、
「茅の輪くぐり」（6月30日）、「お手火神事」（7月第2日曜日）、
「チョウサイ」（9月中旬の金、土、日）、
「渡御・還御祭」（だんご祭りとも）（8月第1土、日曜日）、
「鞆まつり」（12月の第1土曜日）。
- 2) 沼名前神社は延喜式にも見られる古い神社。途中名前が見られなくなった時期もあるが、現在は八幡社、祇園社、渡守神社など多くのお宮が合わせてまつられている。この

神社に奉納された玉垣などの石造物に掘られている、各地の商人や鞆の遊女など寄進者名から当時の鞆の街のにぎわいの一端もうかがえる。

3) 祭りの時の食べ物

「だんご祭り」 餅米とうるち米を蒸してついただんごの真ん中に餡を包んだもの

「お弓神事」 浅蜷汁や浅蜷のぬた

「お手火神事」 タコと大根のなます

「八朔の馬出」 冬瓜とうがんとハモのなます

「ふいご鞆祭り」 にんじん、レンコン、ゴボウや小エビなどを酢飯に混ぜた「ばら寿司」

【こぼれ話】 中村家では、生活を合理化し支出を出来るだけ切りつめるために、食事内容などさまざまな記録を残しています。元旦の朝には「雑煮」を食べています。出しはフクかハゼを素焼きにして干したもので取り、芋、大根、水菜、焼豆腐を入れています。芋、大根は「円満に過ごすこと」を願って丸切りにし、餅も丸餅です。三日からは動物性の食べ物を食べ始め、ぶり、かずのこのほか高級食材であった鯨も食べていたようです。



太田家住宅のひなかざり

3. 江戸時代の商家の面影・太田家と沢村船具店

鞆港のシンボルである「常夜燈」²³の北側には、白壁に海鼠壁^{なまこ}で仕上げられた大きな倉が見えます。文化年間（1804～1817年）に建築された豪商中村家（現太田家）の浜倉を借りたもので、現在「いろは丸展示館」²²として使用されています。

そこを北に進むと、その倉の所有者である「現太田家の本宅」²⁰とその別邸である「朝宗亭」²¹が小路を挟んで東西に並んでおり、いずれも国の重要文化財に指定されています。

「太田家住宅」と「朝宗亭」とは、江戸時代に保命酒の醸造、販売を手がけていた中村家の遺構です。太田家の広大な敷地には、本宅の他、保命酒の醸造のための施設とそれを収めるための倉が建ち並んでいます。また、太田家の意匠は一見地味に思えますが、土間の天井に網代^{あじろ}を用いるなど、各所に茶道の教養に裏打ちされた瀟洒^{しょうしや}なものとなっています。洗練された意匠の客室や茶室を備えた大田家住宅と朝宗亭は、藩主の御成^{おなり}や本陣・賓客の宿所に用いられる「海の本陣」であったのです。

また明治維新前夜、尊皇攘夷を主張する三条実美ら7人の公卿が、公武合体派に追われ長州に下る途中、鞆の浦に寄港した際には、譜代阿倍家の支配下にもかかわらず受け入れています。国際的な港町としての歴史を持つ鞆の町のふところの深さかもしれません。

太田家から古い町並みを残す小路をさらに北に進むと県道に突き当たりますが、その角に、江戸時代以来の古風な店構えを今日に伝える「沢村船具店」¹⁸があります。

江戸時代の鞆の家並みは、平入り^{ひらい}の二階建てが一般的で、屋根は寺院で用いられるような本瓦葺きで、全体に骨太で重厚なつくりとなっていました。二階の高さは様々ですが、近隣の倉敷や竹原のように漆喰^{しっくい}で塗り上げた仕上げはあまり見られず、窓には木格子を入れていました。一階の店舗は、出格子や蔀戸^{しとみど}（跳ね上げ式の大戸）になっていました。沢村船具店では、今日では珍しくなった蔀戸の構えを見ることができます。

1) 平入りとは、道に対して勾配屋根の棟を平行になるよう建物を配置するもの。

【こぼれ話】 江戸時代に独占的に保命酒の醸造を手がけてきた中村家（現在は太田家）の敷地には、家業のための幾棟もの倉が中庭を囲むかたちで建てられています。倉の壁には、平瓦を張り、その目地に漆喰を半円形に盛り上げて仕上げる海鼠壁が用いられています。それぞれの倉の壁は違ったデザインの海鼠壁になっています。これは火災などの非常時の際に、明かりがないときでも倉の壁を眺めれば、ただちに自分のいる位置を理解できるように心配りがされていたのです。



ガラス窓を使わないで、昔ながらの藪戸を活かした船具店

3・江戸時代の商家の面影・魚屋萬蔵宅から対仙酔楼へ

「沢村船具店」¹⁸前のT字路を東に進むと、再びT字路となり右（南）へ折れてしばらく行くと「魚屋萬蔵宅」¹⁵があります。いろは丸事件の際に、坂本龍馬が紀州藩と談判を行ったと言われている住宅です。空き家となり取り壊されようとしていましたが、近年「貴重な遺構を保存しよう」とする地域の人々によって修復され、江戸時代当時の姿を見せています。

反対にT字路を左（北）に進むと道がやや緩やかな坂となり、その上の台地に「鞆の津の商家」⁶があります。江戸時代末に建築された建物で、かつて「鞆製網合資会社」などに用いられていましたが、今日では市重要文化財に指定され再生・保存されています。外観の美しい建物ですが、なかでも正面右側の土蔵は、二階建ての町家に見えるようにひさしを設けているのが、他に例を見ないユニークな意匠となっています。

さらに道なりに東北の海岸通り方向へ向かうと、再び坂本龍馬ゆかりの民家に出会います。廻船問屋であった「桝屋」²の建物で、交渉に向かう龍馬一行を二階にある6畳ほどの部屋に泊めたと伝えられています。現在では敷地東側が埋め立てられ、海岸道路となっていますが、江戸時代には屋敷地の裏側（東）は、すぐ海となっており、浜から荷を上げる問屋業には最適な場所であったのです。また東側に開かれていた座敷からは、仙酔島、弁天島の美しい景色を一望することができたでしょう。

さらに海岸通りに出て南に向かうと、江戸時代の儒学者頼山陽(1781～1832年)がここで日本外史の構想を練ったといわれる「対仙酔楼」⁷に出会います。

「対仙酔楼」は、酒製造や問屋などで栄えた豪商「大坂屋」が屋敷の裏側に、文字通り仙酔島と対面する形で建てたもので、海に面する二階建の門の形をとっています。二階の座敷で、仙酔島・弁天島の景色をながめながら来客を饗応するために建てられたものです。

文化11年(1814年)大坂屋に招かれた頼山陽は、この建物を「対仙酔楼」と名付け、ここは「山紫水明の処」とであると書き残しています。(頼山陽『対仙酔楼記』)

【こぼれ話】 「対仙酔楼」を建てた「大坂屋」は、醸造業や問屋で栄えた江戸時代の豪商ですが、捕鯨でも大いに財をなしていました。

江戸時代に鞆の西南に位置する田島の人々は、盛んに長崎・対馬方面の捕鯨に参加していました。当時の捕鯨法は、網を鯨にかぶせ^{もり}鋸でしとめるという勇壮なものでした。大坂屋はこうした田島の人々の捕鯨の元締めをしていたと考えられます。

【弁天島の伝説】 対仙酔楼の向かいに仙酔島と緑青の屋根に朱塗りのお堂のある弁天島が見えます。この島は百貫島とも言い、お堂のそばに文永八年（1271年）の年号が刻まれた九重の石塔があります。この石塔や百貫島の名前の由来には悲しい話が言い伝えられています。

昔近江の正道という武士が巖島神社参詣の途中に鞆に立ち寄り、弁天島の近くで誤って家宝の太刀を海中に落としてしまいました。引き上げてくれた者には銭百貫を与えるからと頼んでも誰も引き上げてくれません。地元の人には皆このあたりにはフカが潜んでいることを知っていたからです。しかしそれを知らない正道は「この地には誰も潜って太刀をとってこようという勇気のある者はいないのか。」とののしりました。それを聞いた一人の若者が、「こうまで土地のものを悪し様に言われては、命がけで取りに行くほかない。」と名乗り出ました。若者は海底から太刀を拾い上げることに成功しましたが、彼の下半身はフカに食いちぎられており、鞆の人の名誉を守ることと引き替えに命を落としました。

悔やんだ正道は、賞金の百貫で石塔を建ててねんごろに祀ったと言われています。これが百貫島という島の名前と石塔の由来の言い伝えです。



元大阪屋の門楼で対仙酔楼ともいう。頼山陽がここで日本外史の構想を練った。

【おすすめの本】

- シーボルト著、呉秀三訳注、『シーボルト江戸参府紀行』、雄松堂書店、2005年(1966年)
- シーボルト著、斉藤信訳注、『シーボルト江戸参府紀行』、平凡社、2005年(1967年)
- マシュー・C・ペリー著、斉藤信訳、『ペリー提督日本遠征記』、平凡社、1967年
- マシュー・C・ペリー著、木原悦子訳、『ペリー提督日本遠征記』、小学館、1996年
- 『広島県立博物館開館 15周年記念 阿部正弘と日米和親条約』(広島県立博物館編)、広島県立博物館、2004年
- 『朝鮮通信使と福山藩港・鞆の津』(福山市鞆の浦歴史民俗資料館・壇上浩二編)、福山市鞆の浦歴史民俗資料館活動推進協議会、1990年
- 『鞆の浦の自然と歴史』(福山市鞆の浦歴史民俗資料館友の会編)、福山市鞆の浦歴史民俗資料館活動推進協議会、2005年(初版1998年)
- 『特別展 保命酒展』(福山市鞆の浦歴史民俗資料館編)、福山市鞆の浦歴史民俗資料館活動推進協議会、1992年
- 『瀬戸内海と名作～鞆(TOMO)を中心として～』(福山市鞆の浦歴史民俗資料館・壇上浩二編)、福山市鞆の浦歴史民俗資料館活動推進協議会、2003年
- 『国際都市鞆(TOMO)が見えてくる 古文書、文献調査記録集 朝鮮通信使と福山藩・鞆の津 その、その』(福山市鞆の浦歴史民俗資料館友の会編)、福山市鞆の浦歴史民俗資料館活動推進協議会、2003年、2004年
- 『北前船とその時代～鞆の津のにぎわい～』(福山市鞆の浦歴史民俗資料館編)、福山市鞆の浦歴史民俗資料館活動推進協議会、2004年
- 『鞆の津の風雅 町人文化の栄華』(福山市鞆の浦歴史民俗資料館・壇上浩二編)、福山市鞆の浦歴史民俗資料館活動推進協議会、2005年
- 『鞆の津 中村家文書目録』(福山市鞆の浦歴史民俗資料館編、青野春水監修)、福山市鞆の浦歴史民俗資料館活動推進協議会、2006年、2007年
- 『鞆の町並みと商家の賑わい～シーボルトも称賛～』(福山市鞆の浦歴史民俗資料館編・壇上浩二編)、福山市鞆の浦歴史民俗資料館活動推進協議会、2007年
- 『幕末～三条実美と七卿落・坂本龍馬・民衆の激動～』(福山市鞆の浦歴史民俗資料館編・池田一彦編)、福山市鞆の浦歴史民俗資料館活動推進協議会、1998年
- 井伏鱒二著、『鞆ノ津茶会記』、福武書店、1986年